

地域で活躍する21人にインタビュー

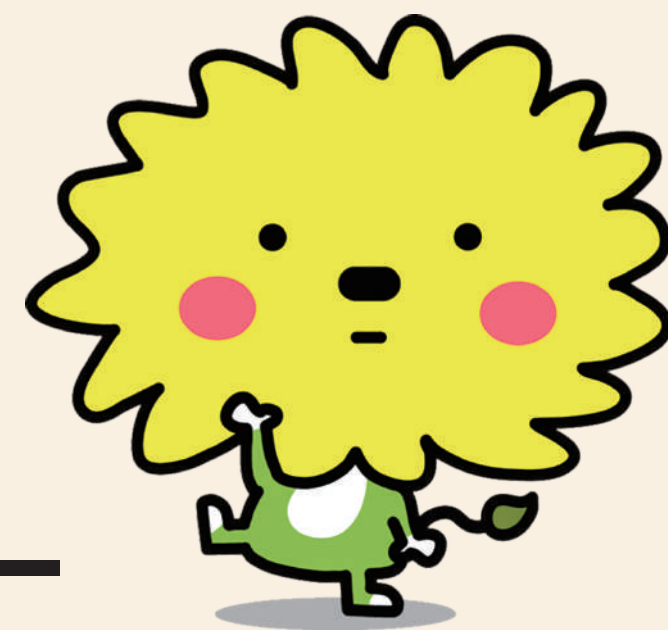
阿南人

大正大学の
学生が取り組む
オンラインの
まちづくり





21人の 阿南人 インタビュー



「阿南人」の皆さま

大正大学地域創生学部は2016年から阿南市で地域実習を続けています。1期生が新野町内を自転車で駆け回り、町の人たち取材して冊子「新野人」を制作したのを皮切りに、2期生が新野人 Vol.2、4期生はミライ企業冊子と、地元の人や企業の皆さんとの交流を記録に残してきました。本年も1・2・3年生42人が阿南に来て、路線バスや自転車で移動しながら地元の人取材する予定でした。残念ながらコロナ第6波でリモートでの実習となりましたが、多くの方々にご協力いただき21人の皆さんを紹介する「阿南人」を発行することができました。農業、子育て、環境、地域おこし、起業…さまざまな分野で活動する人たちが阿南市をそして日本を支えています。「もっとたくさんのことを話したのに!」「本当はこう書いてほしかった」という声も聞こえてきそうですが、学生たちが一生懸命に作った文章ですのでご理解ください。地域創生を学ぶ学生にとって、貴重な経験を与えていただき本当にありがとうございました。どのインタビューでも合言葉は「次回はぜひリアルにお会いしましょう!」でした。

学生が阿南に来て「阿南人」の皆さんに会える日が待ち遠しいです。

大正大学地域創生学部 実習指導教員 鈴江省吾



Profile

E-yo Tokushima in Japan 代表 田井文枝さん

徳島生まれ徳島育ち。フリーアナウンサーとして司会業もこなす。徳島の各地取材した経験をヒントにオンラインショップ『E-yo Tokushima in Japan』を開設。「よい製品を生み出す秘訣はONとOFFの切り替え」と、休日はしっかり休むようにしているという。趣味は登山。おすすめの山は剣山。
●E-yo tokushima in Japan(ええよ徳島) <https://e-yo-tokushima.net/>

取材・記事 / 阿南一派なり



徳島の魅力をカタチにして世界にお届け ええもんつくるぞ!「E-yo tokushima」

徳島の魅力を世界に発信するために田井さんが立ち上げた『E-yo tokushima in Japan (ええよ徳島)』は、英語版のお遍路経本やお守り商品の開発でスタート。最近では徳島県産の肉、野菜を使用したミールキット『T-meal』に力を注ぎ、オンラインショップでも注目されている。無添加にこだわり、急速冷凍することで新鮮な状態で長期保存を実現。独自のワンダークック製法で、レンジで加熱するだけで無水調理を可能にした。それにより、忙しい人や料理で体に負担をかけたくない人も手軽にこだわりの一品を楽しめる。きっかけは、義理の母の「レンジでできる方が良い」という一言だそうで、これからの高齢化社会の手助けとなるようにとの思いが込められた商品になっている。企業理念に「人の役に立つ商品づくり」を掲げる。ひらめきと思いつき、人の声をもとに商品開発が行われているのだ。「いいものは必ず残る」。田井さんの言葉には自身の商品に対する思いと覚悟が込められていた。



アクティビティで阿南を駆ける 阿南に呼ばれた男の物語。

家族旅行をきっかけに四国に興味を持ち、その際まだ訪れたことがなかった阿南市に惹かれ、地域おこし協力隊として北海道から移住。現在は体験型観光を推進するグランフィットネス阿南観光協会のスタッフとして、充実した毎日を過ごしている。グランフィットネスとは自然を感じながら体を動かし、心と身体のバランスを整えるという新しいスタイルのアクティビティ。活動を通じ、リバー SUP やトレッキングなど、ガイドとしての経験を積んでいる。協会ではSDGsや環境保全にも取り組んでおり、今年3月13日、陸からでは届かない川のゴミをSUPに乗って拾い上げるリバークリーン（清掃活動）にも参加した。「桜や紅葉も、SUPに乗って川から眺めるとまた違った楽しみがある」という。移住して3度目の阿南の春を迎える齋藤さん。「阿南市は程よく田舎で住みやすい街。生活に必要な施設は揃っており、都会で感じる窮屈さもない」と語った。

Profile

阿南市地域おこし協力隊 齋藤悠河さん

北海道出身。馴染みのない阿南市に直感的に魅力を感じ、2020年に地域おこし協力隊として着任。自身の好奇心旺盛な性格を活かし、現在はSUP、トレッキング、ボタリングなど様々なアクティビティに挑戦中。自宅では三匹以上の猫と暮らしていて、里親募集などの活動なども行っている。

●グランフィットネス阿南観光協会 <https://granfitness.jp/>

取材・記事／カップ麺



Profile

アントファーム 野村祐佳さん

農業歴4年目。「イチゴが好き」という理由でイチゴ農家を志すも、イチゴを一人で育てるのは難しいと断念。農協で1年間、勉強し直し、農作業にかかる負担が少なく女性でも育てやすいアスパラガスに着目し、栽培を開始。丹精込めた自慢のアスパラガスをたくさんの人に味わってもらえるよう、現在ジェラートの販売を準備中。

●アントファーム <https://antofarm.com/>



自慢のアスパラガスで 作ったジェラートを たくさんの人に味わって欲しい

化学肥料は一切使用せず、厳選した有機肥料のみを使用して作った『アントファーム』のアスパラガス「せいくらべ」は、みずみずしい食感で栄養も満点。そのまま食べても美味しいが、「季節を問わず、多くの人にアスパラガスの魅力を伝えたい」と、ジェラートに加工して販売するという計画が進行中だ。アイスクリームの研究からはじめ、最終的にジェラートにたどり着いたそうで、「ジェラートなら機械に入れるだけで簡単にできますよ」と明るく笑う野村さん。その味が気になるところだが、「将来的にインターネット販売も始めたいと考えているので、お楽しみに！」とのこと。自身が育てたアスパラガスを手にしてもらい、消費者の声を直接聞こうと『まちゼミ』にも参加。『アントファーム』では菜の花の収穫体験も行っていて、土づくりから選別・収穫まで、女性ならではの目線や気配りで丁寧に作る野菜の魅力を伝えようと、様々な方法でPRや宣伝にも力を注いでいる。

取材・記事／いちご



Profile

株式会社Miraicleマネージャー 濱田英美さん

阿南市出身。阿南の魅力は「山、川、海に囲まれつつも生活がしやすいところ。豊かな自然環境を生かし、サーフィンなどのスポーツやアウトドアも気軽に楽しめます」という。自身もキャンプやシュノーケリングをすることが好きだそう。

●株式会社Miraicle <https://miraicle.or.jp/> ●NuuN | CAFE&BAR・子育て支援スペース <https://nuun-anan.com/>



こどもたちが世界に羽ばたき 世界とつながる 環境をつくりたい

保育英語事業などを通じて、地域のグローバルなミライづくりを行う『株式会社 Miraicle』。濱田さんが「保育×英語」に興味をもったのは英語保育園への転職がきっかけだった。英語保育園とは、会話の際に先生やこどもが「English only」で過ごすことで、数ヵ月で英語を話せるようになるためのサポートをする保育園のこと。「多文化のコミュニケーションに触れ、こどもたちがのびのびと遊び、成長してほしい」との思いで保育に取り組んでいる。こうした活動の拠点となるのが、空き店舗をリノベーションした『NuuN』。1階がカフェ、2階がコワーキングスペースで、絵本の読み聞かせや音楽イベント、ポップアップストアなど様々な催しも行っている。阿南市では在留外国人や技能実習生の人口が増加しており、「もっと気軽に国際交流できる場所を提供したい」と、3階にゲストハウスの開設を計画中。国籍問わず、多くの人が集まる環境づくりを目指し、尽力している。

取材・記事／阿南マスターズ

父から受け継いだ 農業のバトン 夢は地域と共に歩む農業

「市役所に勤務していた頃には出来なかったことを、民間の立場で存分にやってみたい」という柏木さん。4代目阿南市東京事務所長として阿南のシティプロモーション、ふるさと会、港区との連携、移住促進などに尽力し、31年間の公務員生活に終止符を打ち、家業を継いだのは2021年4月。本格的に大規模な稲作経営に乗り出した。安定した職業からあえて農業という道を選んだ理由は、「阿南から米作りが無くなってしまうのでは」という危機感があったから。いったん農地でなくなってしまうと、再び作物が育つ土壌に戻るのはとても難しい。父親も高齢化し、その不安は大きくなっていったという。「昔から実家周辺は阿南でも有数の穀倉地帯。父から稲作技術を学びながら受け継いだ農地を守り、農業という分野を後世へ繋げていきたい。阿南という地域で持続可能な農業の枠組みづくりにも取り組んでいきたい」という。そんな柏木さんが手塩にかけた苗が、水田に仲良く並ぶ田植えの季節がもうすぐやってくる。

取材・記事／飲食店



Profile

農業事業 青橋代表 柏木章宏さん

阿南市役所を早期退職後、実家の米農家を継ぐ。退職後も東京事務所に勤務していた頃の人脈をいかし、淡島海岸など豊かな自然を関係人口と共に守っていく『SUPタウンプロジェクト』のサポートを行うなど、まちづくりに貢献している。「阿南のおすすめビュー是那賀川大橋から見る朝陽と夕陽。海鮮料理もぜひ食べてみて！」。





Profile

地域おこし協力隊 平瀬紗衣さん

兵庫県生まれ。「SUPでまちおこし」をキャッチフレーズにした『阿南SUPタウンプロジェクト』に興味を持ち、阿南市へ移住。グランフィットネス阿南観光協会でSUPのインストラクターも務める。協力隊卒業後は定住し、空き家をリノベーションしてあたたかい阿南人が集まるゲストハウスを運営したいと考えている。

●阿南SUPタウンプロジェクト <https://sup-anan.com/> ●グランフィットネス阿南観光協会 <https://granfitness.jp/>



阿南の人はみんなあたたかい 任期終了後も ここに住み続けたい

身体を動かすことが好きな平瀬さん。高校生の時に「みんながやっていないことをしたい」とボート部に入部。そうした経験をいかし、グランフィットネス阿南観光協会で地域おこし協力隊として活動している。「SUPを始めたときに自分にあっていて感じました。水上で使う体幹は、陸上競技と使う体幹とは違うんです。それも面白いと思って」と、着任を機にSUPインストラクター資格を取得した。地域おこし協力隊の任期は3年。任期終了後の協力隊の定住率は全国平均で6割といわれているが、平瀬さんは定住を希望している。その理由を住み始めた頃のエピソードを例に挙げ、「玄関を出て、家の前にいた近所のお年寄りに『おはようございます』と挨拶をしたら、『ピーマンいるか?』といわれ、大量のピーマンをいただいたことがあって。初対面とか関係なく、とにかく人があたたかい。そこがとても気に入っています」。将来は阿南市内にみんなが集まるゲストハウスを作りたいそうだ。

取材・記事／Winter SUP



Profile

株式会社JouZo 住友正伯さん

徳島県阿南市生まれ。広島県呉市の地域おこし協力隊を経て阿南市にUターン。2021年に『JouZo BEER BASE』を立ち上げ、すだちなど地域の特産品を掛け合わせたクラフトビールの製造・販売を通して地元の魅力を全国に発信している。将来はこどもたちが栽培したホップで作ったビールを大人に飲んでもらうようなイベントをしたいと考えている。

●JouZo BEER BASE <https://jouzo.co.jp/>



ビールの作り方を知る醸造所 その一滴から広がる 阿南の魅力

ビール作りの手法を企業秘密として非公開にしている企業は多い。ビールの作り方は無限にあり、美味しいビールを作るのは至難の業だ。「会に行けるブルワリー」をコンセプトにした『JouZo BEER BASE』では、タッブルームや建物の外からも醸造スペースを見ることができ、設備の見学もOK。「あえて作り方を公開し、お客様とコミュニケーションをとることで、お客様から味のヒントをいただいている」という住友さん。その言葉の端々から活動を通して多くの人に「阿南市に来てほしい!」「地域に貢献したい!」という気持ちを強く感じられる。「阿南の良さは、『次はこういう味をやってみたい』と周りに相談するとすぐ農家さんに繋いでくれて、連絡して会いに行けること。応援してくださる方々の力も借りて、これからも他にはない尖ったビールをつくっていきたい」と笑顔で意気込みを語った。

取材・記事／アルコール人間



Profile

WUTO-WURK 木元靖博さん

徳島県阿南市橋町にあるハンバーグレストラン『WUTO-WURK(ウト・ワーク)』の2代目。橋湾を一望出来で、創業時より多くの地元住民に愛され、地元と共に成長してきた。現在、鳥獣被害対策の一助となるよう、ジビエ料理の提供も行っている。

●WUTO-WURK <https://www.wutowork.com/>



料理でジビエの美味しさと 命をいただくことの 大切さを知ってもらう

“ジビエ”と聞いて、「臭い」とか「味が独特」といった印象のある人や、「食べたことがない」という人も多いかもしれない。近年、徳島県でもシカやイノシシによる鳥獣被害は深刻化している。生態系に甚大な影響を及ぼすため、駆除の対象となっているシカやイノシシの多くは利用されずに廃棄されているのが実状だ。木元さんは「ジビエの美味しさを知ってもらい、命をいただくことの大切さについても知ってもらいたい」と、肉のまま提供するのではなく、様々な料理にアレンジしやすいミートベースとしての活用や下茹でなどを施した半加工品で利用価値を高める取り組みに挑戦をしている。ジビエ普及を妨げる一因として、ジビエに対する偏見と誤った知識があるという木本さん。市内の高校を中心に出前授業を行う中で、特に親世代にマイナスイメージが浸透していると感じたという。「正しい情報に目を向け、判断して欲しい」と若い世代に問いかけた。

取材・記事／須藤剛志



Profile

阿南商工会議所 町田哲子さん

阿南商工会議所の伝統ある女性会の会長を務める。経営する料亭の周りには、枝垂れ桜が花を咲かせ、4月初旬頃までが見頃。女性会以外にも自衛隊徳島駐屯地友の会の副会長など多方面で活躍する一方で、こどもたちに書道を教えるなど、地域とも人一倍真剣に関わっている。将来の夢は“さくらのまち あなん”を実現させること。

●阿南商工会議所 <https://ananci.or.jp/>

取材・記事／田中涼資



みどりのカーテンプロジェクト 大事ななのは“何かに打ち込む”こと

コロナ禍、女性会で10年間続けてきたごみゼロ運動も継続できず、こどもたちも部活動や習い事の発表の場を失い、「打ち込むものがない」といった声をよく聞くようになった。そうした声に耳を傾け、企画したのが『みどりのカーテンプロジェクト』。ゴーヤの苗を育てて緑のカーテンを広げることで、地球温暖化防止に繋げ、地域を活性化しようと阿南市内の14校が参加し、2021年6月に始まった。こどもたちが楽しんで参加できるよう、学校対抗のフォトコンテスト「みどりのカーテン写真コンテスト」も実施。この活動は10年計画で継続的に行うと同時に、自分たちで育てたゴーヤを使い、食育としての機能も果たせるよう考えているのだとか。町田さんは「生きものを育てる過程でその大切さや難しさを教えられました。そして何より、女性会やこどもたち、そして地域がコロナ禍であっても団結したように感じました」と感想を語る。今後、どのような活動に発展するのか、女性会から目が離せない。



Profile

日和ファーム 宮内豊美さん

徳島県出身。島根大学で生物自然科学を学び、部屋が観葉植物で埋まるほどの植物好き。有機農法で米を栽培する『日和ファーム』に勤務し、農業体験を通して若い世代に米作りの魅力を伝える取り組みも行っている。仕事と子育ての両立に奮闘中。

取材・記事／カップ麺



勇気100倍！有機農法 お米で阿南をブランド化！

宮内さんから見た阿南市は、公園が多くあちこち探索する度に新しい発見があって楽しい街だ。そんな阿南市で子育て奮闘中の彼女だが、遅くまでこどもを預かってくれる保育施設がなく、仕事との両立はかなり厳しかったという。

『日和ファーム』の特徴である有機農法は、化学肥料や農薬を使用しないため手作業での除草などの害虫対策が行われている。また「つくり手の健康を考えよう」をモットーに従業員の健康へのこだわりを徹底しており、つくり手と買い手が農薬不使用によって安心できる関係を構築している。しかし有機農法のデメリットとして通常のお米の半分の量しか収穫出来ないため値段も高額になってしまう。そこで値段に見合った価値をアピールできる営業力とオンライン販売を駆使して売り上げをカバーしている。

米を作る上でのこだわりをより広く発信していくことでこれまでの農業生産の方法が見直され、今後農薬を使わない有機農法が主流になっていく日も近いだろう。

人とまちが輝ける阿南を目指し 地域コミュニティの 力になりたい

仁尾さんが新聞販売店の経営を志したのは、幼少期に偉人の伝記を読んで抱いた「社長になる」という夢と、学生時代に居場所を作ってくれた大人への憧れがきっかけだという。自ら発行するコミュニティ新聞では、取材する場面に関わる人々の思いや背景を様々な角度から伝えることを大切にしている。また、やまなみ遊歩道の荒廃した竹林を整備すれば、眺望や雰囲気がよくなり、さらには共に働く新聞配達スタッフがもっと活躍できる場を創れると考え、竹林再生にも取り組んでいる。竹には様々な活用方法があり、粉末にすれば水稻栽培の土壌改良材になり安心安全な米を作ることもできる。今後は竹炭やシイタケ栽培などと合わせて放置竹林を解消し、美しい竹林が広がる阿南市を目指す。「地元を大切に思い、世界的な広い視野を持った仲間が育つ場所に阿南になってほしい」。仁尾さんの言葉には「地域の一助を為す自分でありたい」という強い思いが込められていた。

取材・記事／阿南マスターズ



Profile

新聞販売店 仁尾修治さん

徳島新聞の販売店の他、竹林再生や乳製品販売など多くの事業を手掛けていて、「やってあかんかったら、やめればいい」を信条に活動の幅を広げている。登山やキャンプなどアウトドアが好きで、竹林再生も趣味の一部。阿南の魅力は「自然が豊かで食べ物が美味しくて、人懐っこい人が多いところ」という。



Profile

富岡公民館館長 山本隆司さん

富岡生まれ富岡育ちの72歳。音楽が好きで、新型コロナウイルスが流行する前は、神戸や高松へ音楽を聴きに行ったり、舟木一夫のコンサートにも行ったりしていたそう。今回は映画館の歴史について研究している学生の希望で、かつて富岡町にあった映画館についての話を伺った。

取材・記事／熊谷ひなた



「いい時代やった！」 気になる富岡の映画館！

かつて富岡にも映画館が5つあり、当時の様子にも詳しい山本さん。「今、徳島県内にある映画館は北島町に1館、徳島市に2館。あわせて3館だけど、昔は至るところに映画館があったんです。富岡東映、富岡松竹、富岡映劇…。アニメ映画や時代劇を楽しみに、家族みんなで映画館へ行き、子どもたちは映画館の主人に「チケットをくれ!」と言ってサービスしてもらったこともあったそう。「今はもう映画館は残っていないけれど、たくさんの人々の思い出の場所でした」。今とは少し違う昔の映画館について知ることは、きっとまだ知らない阿南との出会いになるはず! 山本さんが館長を務める富岡公民館では、料理教室やものづくり教室、体操教室などさまざまな行事を行っている。コロナ禍で一時期中止を余儀なくされていたが、現在は少しずつ再開しているそう。「みなさんあそびに来てください!」とメッセージを送った。



Profile

漫画家 大東優也さん

徳島生まれ徳島育ち。絵を描きながら作業用BGMとしてラジオを聴いていて、お笑いが好きで、最近は芸人さんのラジオを聞くことが多いそう。「おもしろいことをやってみたい」と、中学校への出前授業やYoutubeなど、多岐にわたり活動を展開中。

●ヒノマルプロジェクト <https://www.hinomaru-project.com/>

取材・記事／阿南一派なり



自分が描いてきた漫画が 徳島と人をつなげる架け橋に

大東さん原作の長編漫画『HINOMARU! (ヒノマル!)』はアニメ放送も行われているが、映像は徳島が地元の6人で制作されているのとか。「人数は少ないけれど、まあ、やってみようと思って挑戦してみた」というから驚きだ。またアニメに欠かせない声優も、地方では活躍の場や切磋琢磨する機会も少なかったため、自ら声優のコンテンツをつくり、声優教室も開設（声優教室では生徒出演のボイスドラマ収録もあり）。アニメ『HINOMARU!』への起用も行っている。さらに四国放送ラジオで毎週日曜深夜10時半から『ヒノマル☆SUNSUNラジオ』も放送中で、パーソナリティは県内で活躍中の声優や漫画家、アーティストが務めている。アニメも含めヒノマルプロジェクトに関わる人はほぼ全員徳島県民! 番組内のラジオドラマでは映像がなくても、音だけで伝わるよう、主人公の靴を下駄にするなどラジオならではの工夫もあり。ぜひ聞いてみて。



Profile

移住促進コーディネーター 笠谷紘平さん

地域創生の仕事に励む同級生の姿に刺激を受け、移住促進コーディネーターになることを決意。“一期一会”をモットーに「物ではなく自分を売ってもらう」ことを心掛けていて、前職、オートバイや保険の営業で全国を渡り歩いていたため、今では全国各地に帰りを待つ友達がいるのだとか。趣味は景色のいい場所で珈琲を淹れること。

●阿南市移住交流支援センター <https://www.anan-iju.com/>

取材・記事／阿南ここにあらん



一人ひとりにあった 阿南ライフをサポート

「阿南市のように仕事があり、自然が近く、病院、スーパーなどの生活基盤や社会インフラが充実しているような地域は、全国的にみても数少ないと思う」という笠谷さん。Uターンして感じるふるさと阿南市の魅力は、そんなバランスのよさにあると気付いた。「バランスがいいと言っても、年代やその人の気質や性格によっても求めるものが変わるため、相談者には無理強いせず、一人ひとりに寄り添った提案をしています」。仕事の出来不出来を移住者数で判断されてしまうこともあるが、移住者は「人」。決して「数字」ではない。こちらの都合を押し付けず、相談者に迷惑をかけることのないよう、納得した上で阿南市を選んでくれる人を増やせるよう、常に気を配っている。「移住者と地元の人たちを繋げることで、異なる文化から新たな思考が生まれ、街が成長する。その瞬間に立ち会えるのが今の仕事一番のやりがいです」。笠谷さんは明るく、力強い表情を浮かべながら、そんな風に語った。



Profile

井出雅文さん

阿南市大井町生まれ。44歳。大学卒業後上京し、キャリアコンサルタントとして活躍。2014年の台風12号豪雨による加茂谷の洪水災害でUターンを意識し、2020年5月に阿南市に戻ってきた。現在は個性に合わせ、柔軟に地域をコーディネートする滞在型ボランティアの活動に力を入れている。



お遍路も地域活動も 農業も日替わりで Uターンの私ができること

「外国人ボランティア 100 人を 365 日受け入れている状態を作り出したい」と語る井出さん。太龍寺、平等寺、大井町周辺に外国人お遍路さんが増え、英語は分からないけれどもお接待したり、宗教的文化を伝えたいと思っている地域の人が多いと知り、通訳をしてくれる外国人を集め始めていた。しかし、コロナで事態は一変。外国人お遍路さんに代わって現在は東京の大学生や社会人らを受け入れ、「似た者同士が集まれば、小さな雇用がうまれる」と考え、滞在型のボランティア活動を精力的に行っている。井出さんが主導するボランティア活動は他と異なり、活動内容は参加者の自主性に委ねられている。そのため活動の許容範囲も広く、内容変更も OK。コロナ禍、なんだか物足りない、刺激が足りないと感じている人は、井出さんと地域ボランティアに参加し、発見や出会いを体験してみてもいい？

取材・記事／アルコール人間



Profile

べんざいてんのお家 吉本真菜実さん

元中学校教諭で三児の母。登園3日目に「もう1人で、ようちえんにいけるよ」と3歳の長男にいわれたことで、こどもは小さくても選択して、決めて、行動できることを痛感。2020年度、麹町中学校の研修等で教育を学び直し、大人が変わればこどもが変わることに気づく。『べんざいてんのお家』では「こころの保健室」も展開中。

取材・記事／野村広樹



こどもが決める こどもと決める こどもと大人が育ちあっていく場所

『べんざいてんのお家』というこどもたちの居場所が阿南市柳島町にある。そこは学校に行くことをやめた子や、通わない選択をした小中学生の新しいカタチの学校だ。吉本さんは、こどもがもっとこどもらしく健やかに、大人はもっとこどものように、一人ひとりが自分らしく成長できるよう、数名のお母さんと共に 2014 年、『こどもと . からふる』を立ち上げた。こどもたちの好奇心や興味、関心の中に学びがあることを大切に、ルールや過ごし方などを基本的にこどもたちが決めるスタイルの学校を運営している。例えば毎月の「500 円で何食べる？」の日は、500 円で何を買うのか、誰かと一緒に料理するのか、1人で食べるのか、をこどもたち一人ひとりが悩み、考え、選択し、行動していく日。「こどもを通して、成長すべきは大人だと毎日感じさせてもらい、日々やり直しの連続です」と吉本さんは語った。



Profile

こはる日和店主 新居浩江さん

京都出身で大学時代をアメリカで過ごす。“藍”を使ったお茶や料理を提供する『こはる日和』を経営。その他にも、英会話や料理教室の先生、スポーツチャンバラの元世界チャンピオンであるなど様々な肩書を持ち、「不可能なことはない」をモットーに、今後は新メニューの開発や地域企業とのコラボ企画にも挑戦したいそう。

取材・記事／阿南ここにあらん



しあわせカップルの 愛をはぐくむ藍茶

『『こはる日和』を始めたのは、将来、娘と一緒にできることを探していたから』。新居さんには重度の障がいのある娘がいて、彼女が成長したときに彼女を守り、また彼女が店を守ってくれることを願い、娘さんの名前をもらって店を『こはる日和』と名付けた。『こはる日和』では藍茶とあんバターサンド等のスイーツが楽しめ、藍茶は駅の土産店など5店舗で販売している。毎日注文が入るため、仕込むのが大変だそう。藍は障がい者支援施設の人たちが農業を使わず、丁寧に栽培している地元産の藍を仕入れて使用している。「障がいのある人も地域の人たちと同じように仕事を通して、共生していくことが大切だと思う」と話す新居さん。今後、藍茶をプライダル業界にも売り込みたいと考えているそう。花嫁が青色を結婚式のなかに取り入れると幸せになれるという言い伝えにちなみ、「結婚式で青色の藍茶を飲んで”愛”を育てて欲しい」と晴れやかな笑顔で語った。



女の子が野球をできる環境を整え 次代の選手を育成していきたい！

野球のまち推進課では「野球のまち阿南」を盛り上げるため、野球観光ツアーや野球大会、合宿誘致などの事業を行なっているほか、駅前・商店街の賑わいづくりのため、野球ゲーム「プロ野球スピリッツ」の体験会を開催するなどeスポーツを通じた地域の活性化にも関わっている。龍田さんは元女子プロ野球選手としての経験をいかして、市内の保育園、小学校の児童を中心にティーボール教室を行ない、さらに独立リーグ徳島インディゴソックスの選手による運動教室など、こどもたちが野球に触れる機会を増やすことで、少子化やスポーツの多様化で減少した野球人口の増加を目指している。また、インディゴソックスは女子野球とのコラボなど女子野球の拡大にも取り組み始めた。龍田さんも昨年創設された中学女子軟式野球チーム「徳島インディゴリリーズ」の監督として指導を行うなど、自分と同じように女性が野球を続けられる環境を整え、次代の選手育成を目指している。

Profile

阿南市役所野球のまち推進課 龍田美咲さん

那賀町出身。全国に4チームが所属する日本女子プロ野球機構でレイア(2017)、京都フローラ(2018-2020)と2チームで投手として活躍。2020年にケガのため引退し、2021年から阿南市役所野球のまち推進課で勤務している。その経歴を活かして地域に密着した様々な活動を行い、次代の選手を育成するため日々奮闘中。

取材・記事／石井一徹



「全集中」の目利き こだわりぬいた魚をみんなへ

阿南でおすすめの魚は鰻(はも)。天ぷらや湯引きをして食べるのが一番美味しいという居酒屋『うみぼうず』を経営する久保田さん。「とにかく覚えてもらうためにインパクトがある名前にした」と店名の由来を語る。メニューは当日の朝、漁港で魚を見て決める。そのため段取りがまったく読めないのがこの商売の特徴だが、最近はラクレットチーズを使った新メニューも考案中。女性をターゲットにフライを中心に試行錯誤を繰り返しているという。「お客様に意見を聞き、“いいと思ったことは必ずやってみる”をモットーにしています。メニューはお客様に興味をもって見てもらえるよう、手書きのレシピを基本としていて、椿泊でとれたブリやサワラ、ハモ、のどぐろを使っています。椿泊は日本でも有数の多種類の魚がとれる漁港。そうした場所があるからこそ、旨い魚を提供できるのだと思います」。

Profile

居酒屋うみぼうず 店主 久保田誠さん

椿出身で小さい頃から魚が大好き。建築関係の仕事が続いていたが、昔の水産会社でのアルバイトを思い出し、魚の仕事がしたいと決意。一軒一軒訪ね、約200軒もの顧客を獲得。その勢いに乗り『うみぼうず』を開店。魚へのこだわりが強く、「自分が出す魚には妥協しない、絶対的自信がある」という。

・うみぼうずInstagram <https://www.instagram.com/umibouzu273/?hl=ja>

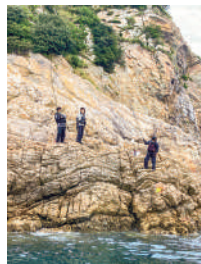
取材・記事／いちご



Profile

青島を守る会代表 原田一十四(はらだ かずとし)さん

阿南市出身。愛称は「ドンちゃん」。47歳で長年勤めた会社を退職し、現在はチヌ釣りのメッカとして有名な「福村磯」で渡船業を営む。自身のFacebookでは釣客が釣った魚の写真などをアップしており、他にも素潜りでアワビなどの漁も行っている。また、沖合の無人島「青島を守る会」の代表も務めている。



阿南はちょうどいい田舎 自然豊かな海を 守りたい

生粋の阿南人。中学、高校はもちろん、社会人になってからも自転車通勤。そのスピードで眺め続けた地域への愛着はひとしおだ。阿南市の良いところを原田さんは、こう答える。「海や山といった豊かな自然がある一方、車があれば買い物にも困らない」。以前は王子製紙に勤めていたが、元々漁師の家系で、親が渡船の手伝いをしていたことから、幼少期よりこの仕事が気になっていたという。これまで渡船業をしていた人が高齢のため廃業すると聞き、「なくしてはならない」と早期退職し、受け継ぐことを決めた。現在は渡船の仕事の他、アワビやタコ漁なども行っているが、温暖化で海の環境が急激に変わっていることをとても心配している。淡島海岸沖にある4つの島の自然を、釣り人以外にも知ってもらいたいと、こどもたちが無人島で楽しく磯遊びができる場所になるよう、高校生に協力してもらいながら清掃活動にも取り組む。話を聞いていて、本当に阿南が好きなのだと感じた。

取材・記事／Winter SUP

インテリアに 懸ける思い 阿南での“住育”

こどものころからインテリアに興味を持っていた吉積さん。阿南に移住後、インテリアコーディネーターとして、インテリアとオーダーカーテンの専門店を営んでいる。大量生産されたインテリアが主流となる昨今。「世界にはもっと綺麗なものがたくさんあり、多様な選択肢ができること、その選択によって暮らしがもっと楽しくなることを伝えたい」と、唯一無二のデザインを世界から集め、一人ひとりの暮らしや生き方に寄りそったものを提供している。吉積さんは一昨年、地域の店が集結した『あなんまちマルシェ』で実行委員長を務めた。イベントを通じて出店者同士の繋がりが生まれ、マルシェを訪れた人に阿南の店を知ってもらいたい機会になったと振り返る。「買い物を通して出店者や地域の人が交流することで、地域に温かみがうまれたように感じました。これからは地域と繋がりを持ちながら、インテリアの楽しさを伝えるとともに、それぞれの暮らしのデザインをしていきたい」と笑顔で抱負を語った。

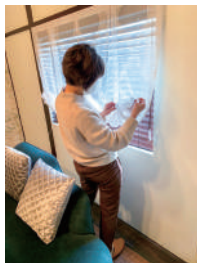
取材・記事／飲食店



Profile

インテリアショップ『san-ai』 吉積晶子さん

インテリアショップ『san-ai』を夫婦で営み、暮らしにそったデザインを提供。こどもたちにインテリアを選ぶ楽しさを伝えるためにワークショップを開催するなど、“住育”という活動も行っている。「阿南の好きなところは、人との距離が近く温かいところ。また食べ物が美味しく、魚介やたけのこなど海と山の幸に恵まれているところ」と話す。



編集後記



塚原優希 (いちご)

自身の活動に誇りを持ち、今に満足せず今後の展望を見据えている姿に圧倒されました。短い時間の中で行われたインタビューですが、阿南をより良くしたいという熱意を凝縮した記事にできたのではないかと思います。その熱意を、記事を読む方々にも感じていただけると幸いです。



秋永小次郎 (いちご)

二人の方の将来の見込みや今自分のしている活動が阿南市の何に役立っているのかを知ることができました。またインタビューを聞いてそれを要約することの難しさや三人称で表現する意味などを知ることができました。自分の将来に結び付けられたいと思いました。



宮川華空 (いちご)

阿南市で活躍する二人の方のお話を聞き実際の活動の様子というものを知ることが出来ました。また文章を端的にまとめる事の難しさを知ることが出来ました。二人の活動に至る経緯や思いを知り今後の自分の学生生活や実習にも生かしていくことが出来るのではないかと思います。



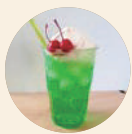
福田菜那子 (いちご)

野村さんの野菜をそのまま終わらせず違う形でより広めていきたいというお話と、久保田さんの魚が身近にあるからこそ本当に美味しい魚を食べてもらいたいというお話を聞き、多くの可能性を見つけることや自分の強みを活かすことがどれ程重要であるのかを実感することができました。



下河邊教淳 (いちご)

阿南のお二人と直接お話をすることができ、そこで工夫しながら生きている人を実感し文章として伝えられることをうれしく思います。お二人のインタビューに共通したことは、阿南を大切にしていること、チャレンジし続けることだったと感じます。今後の私の人生の糧になると思います。



夏賀すみれ (カップ麺)

今回初めて実戦的なインタビューを行い、事前の情報収集の重要性と質問を考える難しさを学ぶことができました。記事作成では、構成や表現の仕方などに苦戦しつつも修正を重ねていく作業がとても楽しかったです。貴重な経験をありがとうございました。



橋口彩花 (カップ麺)

インタビューさせて頂いたお二人の活動を限られた文字数の中で説明することは正直かなり苦戦しました。しかし、インタビューを通して現地にいる人にしか分からないような阿南市の魅力などが聞けてとても貴重な時間でした。私自身、阿南市にさらに興味が湧き行きたくなりました。



鳥飼 響 (カップ麺)

この度はインタビューのご協力本当にありがとうございました。今回2人に取材をおこない共通していたのは「阿南は田舎であり、程よく都会である」ということです。つまり暮らしやすい街だということを理解いたしました。僕も機会があればぜひ阿南市に訪れてみたいと思いました。



鈴木魁人 (カップ麺)

今回のインタビューでは、実際に阿南で活躍するお二人に直接お話を聞けてとても貴重な体験になりました。共通してお二人から阿南に対する強い熱意を感じました。また多くのメモがある中で、それを記事にするために文章をまとめることの難しさを痛感しました。



香川優作 (チーム阿南マスターズ)

限られた文字数の中で、伝えたいことを端的にまとめ、インタビューを受けてくださった方々の想いがしっかり伝わるような文の構成にすることが大変でした。しかし、インタビューを行う中で私自身の将来考えている職業に関することも質問出来たので、それも含めていい経験になりました。



木村拓夢 (チーム阿南マスターズ)

お二人の取材を通して、阿南に対する想いを感じ取ることでできる良い経験になりました。たくさんのお話をしただき、なかなか短くまとめることは難しかったですが、自分たちなりに伝えたいことは書けたのかなと思います。いつか阿南に行きたいと思います。ありがとうございました。



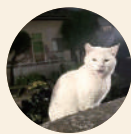
夷藤桜子 (チーム阿南マスターズ)

話を伺ったお二人は全く異なる職業であるものの、人と地域のために活動したいという共通した想いを持っており、将来の展望を語る姿が特に印象的でした。記事の完成に至るまで苦戦した場面もありましたが、阿南の方々の明るさや温かさに触れることができ、貴重な経験になりました。



長谷川悠太 (チーム阿南マスターズ)

今回、実際に阿南で活躍している方々へインタビュー活動やインタビュー記事を作る経験をし、成功するために苦労しているでも阿南が好きだから頑張れる。そう言った思いがものすごく伝わりました。仁尾さんの「やってだめならやめたらええ」、この言葉がこれからの大学生活での原動力として頑張っていきたいです。



鈴木雅彦 (阿南ここにあらん)

アポを取り、メールでのやり取りまで自分たちで行うインタビューは初めてでとても緊張しました。今でもうまく出来たかは分かりませんが本気で取り組んでいるのでぜひ隔々まで記事を読んで頂きたいです。



富岡大和 (阿南ここにあらん)

すべて自分たちでアポをとり、メールのやり取りを行いひとつの記事にできたことはとても貴重な体験でした。実際に阿南に行き、対面でインタビューができなかったのが心残りです。今回は阿南人をお読みいただきありがとうございました。いつか阿南に行く日があればよろしく願っています。



細田真歩 (阿南ここにあらん)

限られた文字数で伝えたいことと記事にすることが難しく、どのようにしたら伝えるかを考えながら今回の記事作成を行いました。インタビューも記事の作成も初めての挑戦だったため不安でしたが、こうして形にできたことを嬉しく思います。貴重な体験をありがとうございました！



山口結衣 (阿南ここにあらん)

この度は『阿南人』をお読みいただきありがとうございます。本来であれば実際に阿南へ訪れ、今この文章を読んでいる貴方にインタビューをしていたかもしれません。コロナによってそれは実現できませんでしたが、インタビューを通じ阿南の魅力を感じることができました。今度は阿南でお会いできることを祈って…。



中島楓 (阿南ここにあらん)

1からインタビューを行い記事作成することが初めての経験でした。今回のインタビューを通じて自分のやりたいことに対してとことん向き合うことの大切さを学ぶことが出来ました。阿南市に行く機会があれば次回はぜひ対面でインタビューを行いたいです！貴重なお話をありがとうございました！



草野誠太 (阿南一派なり)

阿南で活動をしている田井さんと大東さんのお話から、やはり現地で実際にお会いしたいと思いました。田井さんは、阿南で会社を立ち上げて阿南の魅力を国外へと発信。大東さんは、徳島を舞台にした漫画『ヒノマル!』を執筆しています。地元愛溢れるお二人のお話を聞けて濃密な時間となりました。



関野智文 (阿南一派なり)

直接お話を伺うことではじめて知る背景や思いがあることを学びました。阿南の方々の温かさに触れることができ嬉しかったです。インタビューを引き受けて下さった田井さん、大東さん、記事作成のサポートをして下さった鈴江さん、飛田さん、共に努力したチームメイトに心より感謝致します。



岩崎華映 (阿南一派なり)

取材から編集までをやってみて、特に編集作業は0から文章を考えることが難しいと感じた。しかし、阿南で活動する人の生の声を聞くことができていい経験だった。また、自身の課題である質問力の向上もできた実感している。いつか、機会を作って阿南に訪れたい。



芥川友騎也 (阿南一派なり)

社会に出て活躍なさっているお二人の話は新鮮で興味深く、特にこだわっているところを聞いた際にはその人の考えや工夫を知れたのがとても面白かった。また、今回の経験でインタビューをする側の事前の下調べの大切さ、質問内容の工夫など多くのことを学ぶ機会となった。



近藤航平 (阿南一派なり)

今回のお二人へのインタビューで感じたのは質問を設定する難しさだ。相手の回答を誘導してはいけないう、また脈絡のない質問をするわけにもいかない。不安を抱えていたのですが、鈴江さんをはじめ阿南の方々の優しく話しやすい人柄に助けられた。阿南のいいところを再発見する機会になった。



鷺田勝喜 (飲食店)

お二人のインタビューに共通して、とても熱い地域への思いと、なによりも楽しんで活動していってやる印象を受けました。わたし自身、記事の完成まで難しい事も多々ありましたが、全てを通してとても楽しむことができました。貴重な機会をありがとうございました。



田中萌々花 (飲食店)

地域で活躍する方のお話を実際に関けるのは、本当に貴重な機会でした。お話を聞いて驚いたのが、お二人共自分の仕事を自分たちの中だけで完結させず、地域との繋がりがままで考えていたところです。熱量と行動力のある地域住民の存在は、それだけで地域の魅力だと感じました。



金田美咲 (飲食店)

インタビューを終えて、自然や地域の特産品など魅力的な資源が多くあることから、実際に阿南に行って、SUP体験やまち歩きをしたい気持ちが強くなりました。記事作成では、インタビュー協力者皆さんの声が素直に読者に届くように作成することができてとても楽しかったです。



石井優大 (飲食店)

取材をさせていただいているとき、とても緊張していました。しかし柏木さんも吉積さんも取材の雰囲気良くしてくださったおかげで、何とか多くのお話を聞くことが出来ました。柏木さん、吉積さんをはじめとした取材の場を設けてくださった方々、本当にありがとうございました。



田中涼資

今回のインタビューでは「桜のまち あなん」という新しい阿南を知ることができました。昨今の大変な状況が好転したときには、また阿南を訪れ桜のまちとして変化していく様子をこの目で見たいと思います。また今後も阿南への関わりを強くしていきたいと思います。



須藤剛志

鳥獣被害は全国的な社会問題であるが、消費者がジビエに対する偏見や誤った知識を持ってしまったのは、それだけ山や自然に関わる機会が減っていたとも言える。これを改善するには教育という観点から自然に携わり、自然を享受し、自然を学ぶ場が必要なのかもしれない。



野村広樹

今回私は二人の方にインタビューし二人とも魅力的な話をしていただきどちらを阿南人に掲載するか悩んだ。しかし掘り出し感があるほうが阿南人にあっているという話になり今回紹介する方が決まった。お二人とも子供の教育について大切なことを教えてくれたのでしっかりと生かしたい。



熊谷ひなた

インタビューを通して阿南と映画館の歴史について知ることができました。どちらも不変のものはないけれど、変遷を知るとは今を理解する上で重要なことなのだと思います。廃れてしまうものもあれば新しく生まれるものもあり、これからどのように発展していくのが楽しみです。



石井一徹

私も野球の経験があるため、阿南市に日本初の「野球のまち推進課」があり非常に興味を持ちました。龍田さんからは女子野球という観点からお話を聞くことができ、現在、野球教室などで子供たちが野球に触れる機会が多い阿南で、今後どんな活動を行っていくのか非常に楽しみです。

私たちがインタビューをした!!
いつかきっと阿南に会いに行きたい。



「阿南人」

2022年3月発行

発行者：大正大学地域創生学部 東京都豊島区西巣鴨3-20-1

監修：大正大学地域構想研究所阿南支局 阿南市富岡町今福寺42-1

TEL. 0884-49-3899 E-mail. s_suzue@mail.tais.ac.jp

本冊子は「四国の右下」若者創生協議会の令和3年度「県南地域づくりキャンパス」事業により制作いたしました。
このキャンパス事業は徳島県南部総合県民局と管内1市4町が連携し、徳島県南部圏域における交流人口の拡大や若者の発想、大学の専門的知見を生かした地域課題の解決を目的として、大学生によるフィールドワーク等を行なっています。